

京都 神と仏の歳時記

賀茂競馬

菖蒲の節句、その由来を探る

五月五日は端午の節句。
鯉のぼりや五月人形を飾って男子の成長を願い、
菖蒲湯に入る風習は全国に残っているが、
京都では、老舗旅館が
菖蒲で屋根を葺くのを「存知だろっか」
端午の節句と菖蒲の関係は古く、
そのルーツは、上賀茂神社で斎行される
「賀茂競馬」から知ることができる。

写真・文 秋尾沙戸子





5月1日には足汰式(あしぞろえしき)と呼ばれる行事が催され、馬の特徴を見ながら5月5日に走る順番が決められる

「埒があく」の語源

賀茂競馬くまげまは、洛北の上賀茂神社で、端午の節句に斎行される。そもそも宮中武徳殿で五穀豊穰・天下泰平を祈って五月五日の節会に行われていた「きそいうま」が上賀茂神社に移されたもので、古式ゆかしき作法が随所に残る。昭和五十八(一九八三年)、京都市登録無形民俗文化財の指定を受けた。

毎年四月末になると、境内西側の芝生に馬場が作られる。竹に青柴をはさんだ「埒らち」と呼ばれる柵を二本、平行に並べるのである。

五月五日午後、右方うかたと左方さかたに別れ、一度に二頭ずつ五組が競う。乗尻のりしりと呼ばれる騎手は神社氏人末裔(社家)の若者たち。約四百メートルを疾走する途中、たとえば乗尻が鞭で桜の木をさしながら走る作法もあり、群集から大きな歓声があがる。

「賀茂競馬くまげま」の人気ぶりは『徒然草』からも知ることができる。大勢の見物客でにぎわい、「埒」の傍まで近づいても分け入ることができなかつた、と吉田兼好はその盛況ぶりを描く。

いつの時代も天下人たちは賀茂競馬くまげまにご執心で、足利義満も織田信長も、自ら馬を寄進して観覧し、江戸幕府も馬を奉獻、明治政府からも毎年二頭、下されている。

ちなみに、「埒があく」(「かたがつく」)の語源も、賀茂競馬くまげまにあるといわれる。行事が無事に終了して「埒」をはずすところから来ているのだという。「埒があかない」は、その否定形である。



馬は頭に、神職・乗尻は腰に菖蒲を纏う



青柴を結わえるため「柴埒」と呼ばれる



古式ゆかしき作法で、馬を馬場にならす



宮中での節会に倣い、乗尻左方は「打毬楽」の舞楽装束を纏う。彼らは同じ姿で葵祭行列を先導する

乗尻は腰に、馬は頭に、菖蒲を纏って

この日の朝、洛中の老舗旅館の屋根が菖蒲で覆われているのを目にした人もいるだろう。邪気祓いのため、前夜から蓬を添えて屋根を葺くのである。「軒菖蒲」と呼ばれるこの風習は中国から伝わり、平安中期の宮廷から、やがて武家や農家にも広まった。農家では神迎えの意味もあり、古来より田植え前に早乙女らが蔵に籠って身を清めていたが、宮中のこの風習が伝わり、蔵の屋根を菖蒲で葺くようになったという。

独特の匂いを放つ菖蒲や蓬は薬草としても珍重され、魔避けに効力があると信じられていた。枕の下に敷いて寝る「菖蒲枕」、菖蒲の根を刻んで酒に浸す「菖蒲酒」などなど。中でも全国に広まったのは「菖蒲湯」だろうか。頭に菖蒲を巻いて入浴すると病気になるいと言われた人も少なくないはずだ。

なるほど、賀茂競馬でも、本殿御屋根を菖蒲で葺き、馬が頭に、乗尻や神職が腰に菖蒲を纏うのも邪気祓いかと感心するのだが、宮中では節会に天皇も菖蒲蔓を被った



乗尻右方は「狛神」の舞楽装束で

というから、菖蒲信仰は半端ではなかったと推察される。

さらに注目すべきは、競馬が始まる前、「菖蒲根合の儀」が行われることだ。早朝、境内の頓宮に本殿から賀茂大神の御分霊が遷され、まずはその御屋根を最初の乗尻が菖蒲で清める。その後、競う組の二人が菖蒲の根を合わせて大小長短を比べて交換。相手の菖蒲を折り曲げ勝利を予祝する儀式である。その後、同じ作法で本殿前の柵尾神社御屋根をも葺く。

このルーツも平安時代にある。菖蒲の根は柔らかく、上手に長く抜けた根っこは貴重だ。持ち寄ったものの優劣を競う遊戯「あわせもの」の中でも菖蒲根の長短大小を競うこの遊びは人気で、宮中の殿上人や女官たちは神社に必勝祈願をしていたほどである。

「きそいうま」が宮中から移された年の「菖蒲の根合」は、各々上賀茂神社と石清水八幡宮に祈願していた。結果、前者に軍配があがり、勝利をもたらせた上賀茂神社が、その先に選ばれたというわけだ。それも踏まえ、神事に盛り込まれたのであろう。



老舗旅館「柵屋」は屋根を菖蒲で葺く



賀茂別雷神を祀る賀茂社は、平安遷都以前からの歴史を誇る。皇城鎮護の神として歴代天皇から厚い信仰を得てきた

平安京と賀茂競馬

八世紀に都が京都に移されて以来、平安京は日本文化の発信地であり、その慣わしを武家や商家が積極的に取り入れた。現在まで根強く残っているのは、平安京で育まれた文化がいかに魅力的だったかを示すものである。

天下泰平・五穀豊穡を祈願して宮中武徳殿で行われていた「きそいうま」は、寛治七（一〇九三）年に堀河天皇によって上賀茂神社へ移されている。その際、費用を負担する領地として、諸国二十か所の荘園が与えられ、各荘園から一頭ずつ寄進された馬二十頭で、十番の勝負が行なわれた。

会場が移されてもなお、奉仕するのは、宮中の殿上人・左右近衛府の官人だった。神社の氏人に託されるのは鎌倉時代になってから。乗り方、式、作法はそのまま継承された。競馬の後、勝利した方の乗尻が、舞楽の「蘭陵王」と「納蘇利」を奉納したと鎌倉時代後期の神社の記録に明記されている。

今日でも乗尻が各々、「打毬楽」や「拍棹」という舞楽装束を纏って馬に乗る。勝者が舞うことこそないが、彼らは同じ装束を着け、葵祭の行列を御所から先導している。

明治維新と戦後の占領政策で見えにくくなった日本の伝統文化だが、上賀茂神社での神事には宮中の風習を取り入れたものが多く、私たちはそこから平安京の気配を感じ取ることができる。

京都駅前に平安京羅城門復元模型が登場

平安京の表玄関「羅城門」。その十分の一の模型は、平成六年に制作され、長らく京都駅周辺ビルの地下に保管されていました。これを平成二十八年十一月二十一日、京都駅北口広場に展示し、京都駅の新しい名所となっています。ぜひ、お立ち寄り下さい。

【お願い】

平安京羅城門復元模型の維持管理にご支援をお願いしております。詳細は「明日の京都HP」にて。

<http://tomorrows-kyoto.jp/>（明日京／検索）



■平安京羅城門復元模型が京都駅北口広場東に展示されています。ぜひお立ち寄りください

■平成二十九年十月九日発行
発行 明日の京都文化遺産プラットフォーム事務局

T 604・8520

京都市中京区西ノ京朱雀町一番地

立命館大学朱雀キャンパス
（社会連携部社会連携課内）

TEL 075・813・8166
FAX 075・813・8167